「猿女房、新猿女房」

上沢（金取）地区

小野寺憲雄氏からの聞き取り

階上村誌に、「本来当地には特別なる昔話はなく、東北中に有名な浦島太郎や桃太郎などが学校で先生から話された。」とある。平成二十五年四月八日午後に面瀬の歴史などをうかがいに小野寺憲雄氏宅に行ったとき、氏がお祖父様から聞いたこととして「猿女房」というお話をお聞きしたので紹介する。氏はこれも全国のどこでもある話だろうと前置きしてからお話しを始められた。内容的には全国的なものかもしれない。氏のお祖父さんは、やはりそのお祖父さんからお聞きになったのではないかと思う。とすれば、立派に面瀬の昔話といっていいのではないだろうか。でなければ、読者の皆様に教えを乞いたい。他の昔話と同様に、氏のお話を土台として創作を加えているので「新・猿女房」ということになるだろう。

上沢の金取方面には猿が多い。金取温泉では猿が群の頭領を先頭に何十匹も湯浴みをしていたのを見たという村人も多い。この上沢に、三人の娘をもった長者がいた。ずいぶんと田畑をもっている。貧しい水呑百姓には水呑百姓ゆえの苦しさがあるが、こんな長者にも長者なりの悩みがあった。娘三人を嫁がせる相手方のことだ。長者の身上とつりあう相手ということか。上沢の土地の大半をもっている長者だから、娘を嫁がせられるほどに身上のつりあう相手など、めったにいるものではない。そこで長者は、婿殿(むこどの)の条件を、身上の大きい者より、よく働く者をと思い立った。村の役人に頼んで、こんなことを村に触れしてもらった。「この春に、わが上沢の田畑を一晩のうちに耕せた者をわが娘の婿にしよう。」と。

さて、三日たったが現れない。十日たっても現れない。村人は口々に

「あの身上持ちの田畑を一晩で耕すなんて、そいなやづいるはずもねえべ。やっぱす金持ちは欲深いもんだべっちゃなあ。まあ、来年までも現れねえべえ。もの実とれねえで金持ちの困る顔見るのも少し楽しみだっちゃねえ。」

と言い、クスクス笑い合っていた。これ以上田畑をそのままにしていては今年の作物が無理になるという時期のある明け方のことだ。長者の大きな御殿の門口で何やら叫んでいる者がいた。家人が、眠い目をこすりこすり、玄関先に行ってみると、それは一匹の猿だった。家人は、また猿めらが家の中の物をいたずらしに来たのかと思い、棒を持ち出してきて追い払おうとした。すると猿は棒をよけながら言った。

「何だべぇ。話、ちがうっちゃ。」

家人は耳と目を疑った。猿がしゃべってる。うそだべ。聞き違えだ。きょとんとしている家人に、もう 一度猿が言った。

「上沢の三町歩ば 一晩で耕したっす。おらば婿にしてけらいん。」

家人はおどろいて、このことを長者に伝えた。長者は、まさか猿がと思いながら玄関先に行った。間違いなく猿だった。猿に人間様の言葉など話せるはずもない。長者はわざと強い口調で言った。

「猿公(えてこう)めが、人の家の門 口まで来て、生意気(なまいき)なごど言ってるというがら、見てみれば金取の田舎猿でねぇの。とっとどうせろ。そんでねば金取の猿ば皆殺しだぞ。」

すると猿は、

「何だ、何だ。長者が困っているって聞いたがら、一晩で田畑ば耕してやったのになぁ。おらの仲間ば皆殺しにするだとぉ。人間ってぇのは嘘つきだと聞いてだが、、やっぱ本当だったなぁ。覚えでろよ。上沢の金取に住む何十匹もの猿で、この村の田畑をば、あらしまぐってやっかんな。」

と言い捨てると、玄関の戸を引っかき回して、怒りながら、キャッキャ、キャッキャと山へもどって行った。

長者は、猿がしゃべったことにもおどろいたが、猿が言ったことにも何だか 一理あるなぁと思った。家人が長者の田畑に行ってみると、何と、三町歩の田がそれは見事に耕してあった。ところが、三日もたたないうちに、村のあちこちで田畑が荒らされる被害が出てきたのだ。村人は、長者が猿の恨みをかったことで村中が不作になるかもしれないと考え、長者の陰 口をたたくようになった。三人の娘達はいてもたってもいられない思いだった。

「父ちゃん。私達、村の人達がら悪 口されで、やんだごだ。だいたい、父ちゃんが村役人に変なごど言ったりしたがら、こうなったんだいっちゃ。」

長者は、カンカンに怒って、はげ頭のを真っ赤にしながら言った。

「なんだこの親不孝者めらが。お前達を幸せな嫁にするためやったごどば、変なごどとは…いったい何様の気だ。おめぇらごそ、言葉ばしゃべる猿の女房になってしまえ。」

「おどっつぁま、堪忍(かんにん)してけらいん。猿の女房になんぞ、なりだぐねえがら。どうが許してけさいん。」

一番目と二番目の娘は長者にわびた。ところが、三番目の娘は、ニコニコしながら長者に言った。

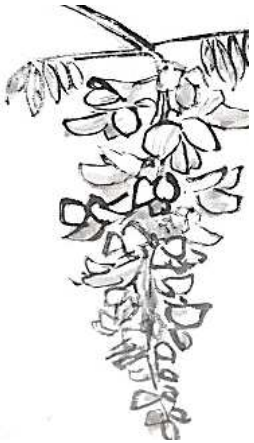
「父ちゃんが猿との約束ば守らねえど、村中が不作になってしまうし、猿はよぐ働くようだがら、私が猿の女房になるがら。」

長者は一番かわいくてかしこい三番目が猿の女房になるなんてと、三日三晩涙が止まらなかった。だが、そうしている間も、村の田畑は荒らされて続けていったのだ。村役人からも、三番目を猿の女房にしたらよいと勧められた。長者は、泣く泣くあの猿を御殿によんだ。そして猿と娘は祝言(しゅうげん)をあげた。

「おどっつあん、娘様ばきっと幸せにするがら安心してけらいん。」

猿は、こう言い残し、二人の夫婦は金取の山奥に向かった。娘はといえば、猿なんぞの女房になるというのに、相変わらずニコニコしていた。家を出て、かなり山奥までやって来た。ちょうど長の森の奥あたりだろうか。見上げると、岩の絶壁(ぜっぺき)に藤の花が幾房(いくふさ)も咲いている。何ともいいにおいを放って崖の上から垂(た)れているのだ。崖の真下には、古い吊り橋がかかっていた。猿女房は言った。

「旦那さん。嫁入りのしるしに、あの藤の花ば取ってけらいん。」



猿は初めて美しく若い女房に頼まれたものだから

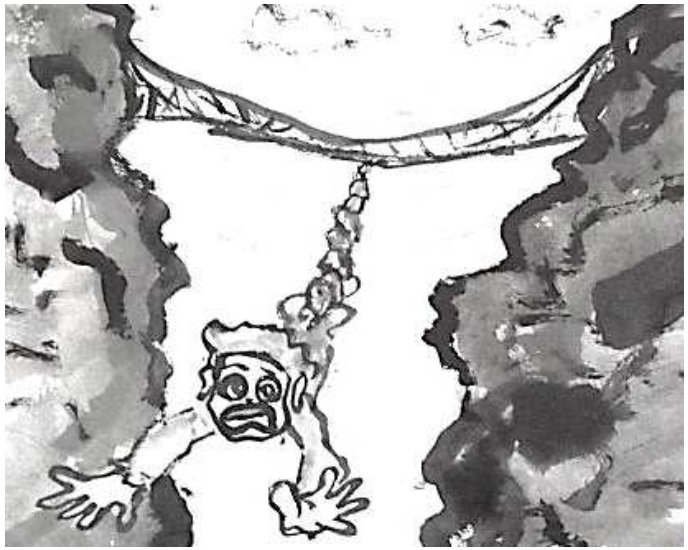
「嫁御や、いっぱい取ってやっから、吊り橋のたもとで待ってでけらいん。」

と言って吊り橋を進んだ。橋の真ん中に行って大きく揺らしたが、崖にはなかなかとどかない。見ていた女房は、

「旦那さぁん。あんだの仲間の猿ば集めて橋ばゆらしたらどうだべ。藤の花さとどぐんでねぇがなぁ。ほれ、みんなばよんだらいいのに。」

と言った。婿の猿は、長の森じゅうにひびくように、合図の叫び声をあげた。初めに聞きつけた十匹の猿がやって来て、吊り橋を大きく揺らした。藤まであと三尺(一メートルくらい)。まだとどかない。

「旦那さん、残りの仲間もよばってゆらすどいいがもしれません。」

猿は、またおたけびをあげた。総勢三十匹の猿たちが吊り橋に乗って、ゆらし始め

た。婿猿の手が、藤の花にとどいたとたん、古い吊り橋は三十匹の猿の重さに耐えかねて、切れてしまった。藤の花も、吊り橋も、猿もろとも谷底に落ちていった。猿女房が長者の御殿にもどって来たのは、祝言の翌日のことだった。長者や姉たちが娘に、どうやってもどって来たのかたずねても、猿女房は相変わらずただニコニコするばかり。何も答えなかった。その後、この娘だけは、いくらまわりが勧めても、他に嫁ぐことはなかった。御殿の裏に申塚(さるづか)をつくって、死ぬまでの間、毎日供養をしたという。その後、上沢では、猿の被害はめっきりと減り、毎年豊作が続いたとのことだ。